だから私は初めのうち、他の班の飯場の様子を知らなかったのです。もちろん、新入りには、どの人が親方なのかわからない。それどころか親方の顔さえしらなかったのです。

新入りの下っぱは、あれこれ知る必要はありません。どうせ「飯場」は仮りのねぐらです。

長くいるつもりはありません。その日その日が何とかすどせればいいのです。

それが何となく月日がすぎて、それにつれて、松本組内部のアレコレもだんだん判ってきました。親方の顔もおぼえました。

松本親方は、やせて色の黒い男でした。そのころ（昭和三十五年）、三十五、六でしたでしょうか。色が黒いのは、職業柄かもしれません。

近眼で眼鏡をかけていました。これで色が白ければ、一見インテリ風と言える顔立ちなのですが、いつも苦虫をかみつぶしたような不機嫌な顔をしていました。

現場へ顔を出しても、プスッと若い衆たちの仕事ぶりを、にらみつけるような目つきで見ていて、もともと無口らしいこの人は、近寄りがたい感じがありました。

肌の色が黒いのは、胃が悪いからかもしれません。胃が悪いのは、やはり経営者としての苦労が多くて、ストレスがたまっているからかもしれません。

色が黒くて、ガリガリにやせていても、どことなくすごみと貫禄がありました。

私など、こわくてこの親方のそばには、なるべく寄りつかないようにしていました。

神経質で、いつも体中が神経のかたまりみたいにピリピリしていました。関西の言葉でいう「いらち」の性格でした。

山どめや、管入れなどのときには、穴のフチにしゃがんで、じっと仕事を見ています。段取りが手順よくいっているときはいいのですが、それが少しでももたつくと、ギリギリと歯ぎしりをして、しまいにはもうたまらなくなって穴に飛びこんできます。

若い衆をつき飛ばして、仕事に手を出します。泥だらけになって「腹起し」を入れ、「切りばり」を入れます。管入れも器用にこなします。

それがまた、早くてうまいのです。

つき飛ばされた若い衆は、はじめはムッとしますが、仕事ではかなわないので降参です。こわい親方です。

もっとも、仕事が順調なときは、そんなことはありま

せん。

だまって、穴のフチにしゃがんでいるだけです。「電線のスズメみたいだ」と、誰かが言いましたが、まったくそんな感じです。

ブスッとしているのがふつうの顔なので、機嫌がいいのか悪いのかわかりません。そうやっていつまでもしゃがみこんでいるのです。

仕事をしている方はたまりません。やっぱり親方が見ていると、手抜きも息抜きもできません。

そしてこの人、短気でした。ケンカッ早いのです。口より先に手が出る方です。

どこかの運転手が、松本組の親方とはしらずに、

「オッサン、そこのかんかい」

と、声をかけたことがあります。

宅地造成の現場で、松本親方は若い衆の仕事の指図をしていたときです。親方はふりむきもしませんでした。

それを横着な奴とでも思ったのでしょう。

「聞こえんのかワレ、そこのかんかい」

と、もう一度、運転手が声をかけたとき、親方は、物も言わずにパッとふりかえったと思ったら、その手はもうスコップをふり上げていました。

それからこんなこともありました。

ご存知、園田の競馬場の工事のときです。

毎日のように何百立米というボリュームの大きいコンクリート打ちがつづいていました。突貫工事です。

ある日、どうしても手が足りなくて、出屋敷から日雇をやとってきました。

日当はいくら、昼めし付き、場所は園田、仕事はコレコレと話がついて、五、六人の屈強そうな男がきました。

来て見てビックリ、仮枠を見て彼らはビビりました。

こ、こんなコンクリ、ホ、本気かいな。

「コンクリの松本」「阪神間で一番」

と、自慢にしている松本の若い衆たちでも、腹をくくってやろうかというボリュームなのです。ひょっこり一日来ただけの連中が尻ごみするのも無理ありません。

無理はないけれど、この連中、すっかりやる気をなくして「帰る」と言い出したのです。

「せっかく来たんだから、一日おれや」

と親方がいいました。何しろ突貫工事です。ネコの手も借りたいのです。みすみすこの連中を帰しては、何のために早起きして出屋敷へ車を迫したのかわかりません。

けれども連中は帰るといってききません。そのうえ、

「帰りのバス代と弁当代を」

よこせ、というのです。

とたんに松本親方の目がつり上りました。

もう何も言いません。そのあたりにあったバタ角をつかんでふり上げると、いきなり連中の一人になぐりかかりました。

さいわい、バタ角はそれましたが、それから先が大変です。逃げ廻る男たちを追いかけ廻して、とりとり競馬場から追い出してしまいました。

今なら、暴力飯場などと問題にされたかもしれませんが、何しろ、釜共闘も、釜日労もなかった頃の話です。

それに、松本親方の名誉のために、一つだけ書き加えておきましょう。この人、気が短くて、ケンカッ早いけれども、バタ角をふり上げても、相手が向ってこないかぎりは、決して、相手の体には当てなかったのです。

もの凄いけんまくで、今にも殺されそうなと思わせれば十分なのです。ちゃんとそのへんの計算はしている人でした。

バタ角をふり上げるときはカッとなって前後の見さかいがなくなっているけれど、ふり下すときには、もう理性がす早く働いているという人でした。

そういう気性の烈しい人だから、土建屋の親方がつとまったのだと言えるかもしれません。当時、百人ぐらいはいた若い衆、いずれも一くせも二くせもある連中をたばねて行くには、ナカナカの根性ではやれないと思います。

しかし、そんなに短気で、ケンカッ早かったら、人が集まらないだろうと思われそうですが、そんなことはありませんでした。

松本親方の飯場には、三年、五年も住みついている若い衆が多かったのです。部下を可愛がり、大事にするという一面もあったのでした。

そして頭のいい人です。

とにかく回転が早いのです。

人と話をしていても、相手の理解をまたずに、どんどん話を先に進めてしまう、というところのある人でした。

相手は話についていけず、まごまごしています。すると相手が馬鹿に見え、いらいらしてしまう。つい、相手を納得させないうちに、自分だけで結論を出してしまうのです。

頭の回転の早い人にありがちな「いらち」な性格で、

協調性に欠けるところがありました。
「松本」というのは、在日韓国人であるための、仮りの姓で、本当の姓は「李」でした。

「李」家の人たち

松本親方のヨメさんは、西宮の自宅に三人の子供と住んでいて、飯場へはめったに来ませんでした。
前にも書いたように、平山飯場だけが、松本組の中で一つ離れていたので、私などはこの姐どのことはよく知りません。
たまに顔を見せると、ビラシャラした外出着で、いかにも奥様然としてとりすましているのが、飯場暮しには似つかわしくないと思わせました。
すらりとして、女にしては背が高く、顔も面長で、美人といえなくもありません。
水商売上りだ、と、だれかから聞きましたが、他の人からは、女学校(旧制)出の才媛だと聞きました。どちらも噂で、本当のところはわかりません。
「水商売上り」
と聞けば、そういえばそうかもしれないと思うようなところが、着る物の好みなどにありました。

女学校出

ときけば、どうだか知らないが、何となくツンツンしてお高く止まってるな、と思いました。
この人、松本親方と結婚しているのに、松本姓も、「李」姓もなのらず、太田姓を名のっていました。二男一女の子供たちも太田姓でした。
朝鮮の習慣では、女は結婚しても夫の姓を名のらず、一生、実家の姓で通します。
朴家の娘は、李家の嫁になっても、家の嫁になっても、やはり朴何々です。
だから、松本親方の妻君が、太田姓であっても一応不思議はない筈です。しかし、それは朝鮮の習慣で、日本の習慣ではないのですから、日本の姓を名のるときは、太田姓より松本姓の方が自然な気もします。
それに、子供たちまで太田姓というのが、チョットひっかかります。朝鮮の習慣では、子供たちの姓は、父方なのか、母方のか、どうなっているのでしょう。
ある本(朝鮮研究の)には、朝鮮では、姓は先祖のもの、名前の二字のうち一字は父のものと考えられていると書いてあります。しかし、その本にも、妻が実家の姓を名のるとは書いてあっても、子供の姓についてまでは書いてありません。

まァ、このことは宿題にしておいて、いずれ朝鮮の友人にでも聞いてみましょう。
一般には、松本夫人は日本人で、国籍の関係から(たぶん、帰化の手続きなど)入籍していないのだと聞きました。
そういえば、日本名をもっている朝鮮人をいろいろ知っていますが、そういう人の日本姓は、金山とか、朴本とか、松田、柳など、一つのパターンがあって、その中に太田姓は聞いたことがないようにも思います。
そしてまた。入籍していない夫婦だとすれば、その子供たちが、母の姓を名のるのは、日本の習慣からも、おかしくないわけです。
あるいは、これが真相なのかもしれません。
ところで、また話が変りますが——
松本組がいつ成立したのか、私は知りません。しかし、松本組の本拠が尼崎でなく、西宮であろうということは想像出来ます。
自宅が西宮にあるから——というだけではありません。
その自宅が、ヤブノ建設からごく近い所にあるのです。松本親方は若いときからヤブノに出入りしていたのでしょう。
私が松本組に入った頃はもう故人になっていましたが、「ヤブノの先代はえらかった」
と、よく聞かされました。
どこがどんな風にえらかったのか、よくわかりませんが、やり手だったにちがいありません。
その先代に松本親方は可愛がられ、引き立てられたのでしょう。
以前、松本組の飯場は道意町ではなく、出屋敷駅近くにあったそうです。今はシボレックスの工場があるところです。
ここは、もともと旭硝子の土地です。それを出入り業者の柄谷工務店が借りて、傘下の各職方を集めて飯賀村をこしらえたのだそうです。
鳶、土工、大工、左官、はつり屋などの飯場がずらりと立ち並んで壮観だったそうです。
前回「ベンガラの話」に出てきた松田組の親方の飯場も、はじめはここにあったのかもしれません。
旭硝子ー柄谷ーヤブノー松本の関係は、これも前に書きました。当時、松本は二百人ぐらいの土方を集めていたそうです。
今とは時代が違います。そのころはいまのように機械力がありません。土工事は、掘り方も、運搬もコンクリ

も、人力が主力です。今とくらべて、土方飯場は人を集めることが大眼目でした。

それにしても、二百人以上の人を集めたというのはたいしたものです。それも人夫出しではなくて請負いなのです。

「肩で風を切る」

という言葉がありますが、松本親方はそんな気分だったのではないでしょうか。

それもこれも、彼自身の実力もさることながら、ヤブノの先代の役おしあればこそだったのでしょう。

この飯場村が、いつからいつまであったのかよく判りませんが、大体、昭和三十年代の初めの頃に解散になったようです。

その土地に旭硝子の倉庫ができることになったからです。旭硝子は、作っても作っても間に合わないほど板ガラスが売れて、もりかっていたのです。

大工も、左官も、ハツリ屋も、それぞれの土地をもとめて飯場を移動しました。松本組も、そのとき道意町に移ったのです。

ここもまた、旭硝子の土地でした。そして、ここでは松本の飯場が三つしか建てられなくて、平山班だけが少し離れた所に飯場を作ったわけなのです。

さて、松本親方直系の飯場の他の二つは、一つが同じ松本(李)姓を名のる、親方の従弟が管理していました。この人は、私が入って間もなく独立して松本組を出て行きましたので、私はくわしく知りません。

もう一つは、松本親方の実系の飯場です。なぜか、この人は李家の長男であるのに本田姓を名乗っていました。

「姓は先祖のもの」

という朝鮮古有の考え方からすれば、これは不思議なことと言えます。そこに何か他人には判らぬ複雑な事情があったのでしょう。

ただし、この本田親方も、朝鮮姓は「李」を名のっていました。だから、その点ではおかしくないのですが、それでもなお、日本名だけ姓がちがうというのは、やはりヘンといえます。

「本田おやじの方が、松本おやじより頭はいいんや」

と、よく言われていました。

「何せ、北野中学卒業やからな」

現在の北野高校も、大阪では五本の指の中に入る名門校ですが、その前身である(旧制)北野中学は、戦前それ以上に名門の評判高かった学校です。

三十代以下の人には、もはや想像もしかねることでしょうが、いまの高校卒とむかしの中学卒では、くらべものにならないほど、かっての中学卒は、学歴として世間

の評価が高かったのです。

その中学の中でも、名門中の名門である北野中学卒業といえば、それだけで本人の秀才ぶりの証明となる程でした。

「何せ、北野中学出やからな」

と、昭和三十年代の三十男、四十男がいうとき、それは輝しい伝説の中の人物について語るのに似たコーフンがありました。

がいこで考えてほしいのは、戦前の朝鮮人のおかれていた社会的地位のことです。

これはもう、「地位」などという言葉を使うのもおこがましいくらいでした。私はこの文章の中で「どれいなみ」という言葉を使いましたが、そういっても誇張ではないと思っています。

いまでも、在日朝鮮人に対する、就職、教育、政治その他、さまざまな差別が、なくなったとは言えませんが、戦前の差別は今より何倍もひどかったのです。

一つ二つ例をあげましょう。

大正十二年の関東大震災のとき、朝鮮人が、手当り次第に殺されました。そのすさまじさは、顔つきが朝鮮人に似ているというだけで殺された人もいるくらいです。

朝鮮人が震災のドサクサにまぎれて、井戸に毒を入れたという噂がひろがったのです。根も葉もないデマでしたが、人々はそれを信じて、各町内に自警団をつくり、朝鮮人とみれば、男女の区別なく襲いかかったのです。

それまで朝鮮人を差別し、虐待してきた日本の政治権力が、仕返しを恐れて意識的に放ったデマだと言われています。

仕返しを恐れねばならなかった程の虐待があったのです。そして、この事件の本当の恐しさ、悲劇性は、そのとき朝鮮人たちを殺したのが、軍隊や警察だけでなく、一般の市民大衆だったというところにあります。

戦争で日本の男たちは兵士として戦場にかり出され、工場でも、炭坑でも人出不足が深刻になりました。そのとき日本政府が思いついたのは、その不足を朝鮮からおぎなうことです。

そして悪名高い強制連行がはじまりました。

畑で働いている農夫が、泣きさけぶ妻子を尻目に連れ去られ、町へ用たしに出た若者がいきなり捕えられ(何の罪もないのに)有無を言わさず、着のみ着のままトラックに放りこまれ、親兄弟も知らぬ間に船につめ込み、行先も知らず日本へ送りこまれました。そういう実例がたくさんあるのです。そして、炭坑や、土木工事で強制労働をやらされたのです。